共同討議の感想

―社会学の立場から―

（仙台）田原音和

ゆっくりした討議の時間がほしいということは、いつの学会でも痛感することであった。鳴子の大会はそういう点では無類の成功だったように思う。しかし、それでも共同討議としてはまとまった結論がでなかった。結論がまとまってでるべき性質のものではないかもしれないが、それにしても村落共同体というテーマの大きさと深さを改めて感じたことである。そのうちから、重要な提言がいくつかだされた。私の興味から多少かたよった感想になるかもしれないが、記憶のためにあえて記しておきたいと思う。

全体の印象として、「むら」の見方に関して、経済史学と社会学の立場をどう結びつけるかという方向にむいていた。というよりは、見方としてどう違うかという点が腹蔵なく語りあわれたように感ずる。率直にいって、「共同体」という概念では経済史学の立場は明瞭である。あるいは「共同体」は経済史学的な概念であるといった方が適切かもしれない。それは水とか農業労働、あるいは山などの、それぞれひとつの契機をもって結ばれた家連合である。そういう意味では家々の結びつきはきわめて機能的であるが、そこに身分的な要素が歴史のかげとして堆積する。生産力のある一定の高さの時期において、これらの諸共同体がそれぞれの重みをもちながら重なりあう範囲が、「むら」であった。それは歴史的段階に対応してその現象形態を異にするが農業共同性というにはせまいし、それで割切れぬ要素がからんでいるから村落共同体とみる、という立論の建前であるように思われた。だから「村落」共同体というときには、経済史学としては思いきった社会学的な見方の導入が感じられる。

一方、社会学の方の考え方は、最初から「むら」を村落共同体として考えようとする。村落としてのひとつのまとまりを先に感じとって、次にそのまとまり（村落結合）の中核は何であるか、それが同族結合なり講組結合

なり、家々の結合の特色であつて、水、山、祭祀、生活共同組織などを一貫して現われるという見方である。だから、「むら」としてのひとつのまとまりを村落共同体として表現しようとするように思われる。社会学では村落共同体という言葉よりも村落構造といった方が、概念的によいのではないかという意見がだされたのも、その意味であろう。中村かちのとりあげた畑山村松ノ木は、「むら」としてどういうまとまりがあるのか、「むら」としての機能力の弱さが、かえつてひとつひとつの共同体を浮彫りにしたといえないか、という疑問や、村落は高橋重助家を中心とする諸共同体の堆積の範囲に、いわば解消されるかといつた問題が提出されるゆえんでもある。島田が、社会学では「むら」を実体的に考えようとするのかという疑問を提出したのも、用語の適否は別として、そういう村落のまとまりを強調することへの不満であつたようにも思う。

こうみてくると、「共同体」の概念はつきりしていても、「村落共同体」というときには経済史学の方でも明瞭になつていないと感じられたのである。結局、共同体を崩壊すべきものとしてとらえようとする立場と、「むら」を共同体的な結合の結合としてみようとする立場のちがいともいえるが、もうひとつ大事な点として、家連合の考え方にも多少くいちがいがあると思う。一方では家連合を身分的に着色された家々の機能的な連合として考え、その家連合は各契機ごとに完結している点を強くみる。他方は、身分的あるいはその他の家結合の特徴を、村落結合の主軸として、「むら」を特色づける点を強調するという風にみえる。もちろん後者にも考え方のちがいあつてそう簡単に割切れないが、「むら」を考える場合には、やはりかなり違つた結果をもたらしているのではないかと思う。

いろいろな問題について発言があつたのでもつと細かい点にふれるべきであるが、以上の点を私なりに大まかにとらえてみたわけである。そこで、社会学では、「むら」を何らかのまとまりとしてみてゆく筋道を、通しながらもつと多角的にこまかくみてゆく必要があると思う。むりにまとまりを強調する必要もないが、そういう点で、政治や行政の機能や土地所有の意味をとりあげる余地も、もつとはつきりしてくるし、経済史学で果たせない点を補ないつつ、両者の結実を止揚できるのではなかろうか。つぎに報告のテーマにも関するが、東北とか近畿とかという区別ではなくて、平場地帯、山村、近郊村、そのいずれでもよいから共通に比較できる大体の条件をそろえて、それからいろいろな地方や時代の「むら」の異同について、比較検討が行われる試みがあつてもよいようである。たとえば共同体が成立したり残存したりする契機の実証も、これからの問題であるが、そういう試みによつた方が、比較の基礎がある程度はつきりする。

ともあれ、今後もいかにも腰の落着いた討論の場として、今回のような試みがいい意味で慣例になればと思うのである。

（三三一―一三）